

# 春燈

2018 November

11月号



主宰の句

安立公彦

終戦日元号重き昭和かな

若かりし母の涙や終戦日

相生の松の父はは盂蘭盆会

新しき明日思ふ日や秋の虹

消えのこる蝸の声獺祭忌



# 久保田万太郎の句

## 茶の花におのれ生れし日なりけり

『冬三日月』昭和二十七年

「十一月七日」と前書がある。万太郎は明治二十二年のこの日、浅草田原町に生まれた。生家は「久保勘」という屋号の袋物製造販売の商家であったが、家業は継がず文学の道歩んだ。五十九歳の作。茶の花を誕生日に見て誇り高く詠っている。この花は華やかさはないが、純白で、金色の蕊の美しさは「わび」「さび」として茶道や俳諧師の嗜好に合う。茶の花への深い関りを感じた。

高 埜 良 子

# 久保田万太郎の句

妻の初七日、妻の姉より申出あり、受諾

ふつつりと切つたる縁や石路の花

『ゆきげがは』昭和十一年

ほんの一昔前まで「浮気は男の甲斐性」などという言葉葉が罷り通った。万太郎はその様な時代の人である。

妻（京）は彼の浮気を苦に自殺。姉からの縁切りの申し出も受諾せざるを得ない。自らの所業に対する悔恨の情と共に、どこことなく居直りの気持も読み取れる。「居直り」とは言い換えれば作家としての目か。万太郎は後に、この妻が主人公と思われる戯曲を発表している。

矢口笑子

# 燈下集



○ 園部 蒞郷

菜園と俳句を愛し茄子の花  
菜園や胡瓜朝とれ夕に取れ  
秋たつや畑にさやぎの雨の音  
父の墓洗ふ父より長く生き  
甲子園反り身の校歌さやけしや(秋田県釜ヶ崎農壇優勝)

○ 松橋 利雄

大昼寝母のこゑ聴き目覚めけり  
ででむしや怪しくなりし空模様  
夜の秋浄めの塩をつまみけり  
逆縁の白木の位牌夏座敷  
新涼や復刻版の『風立ちぬ』

○ 橘 正義

靴左右色違へたる涼しさよ  
火星と月仰ぎて月下美人を見  
月下美人台風の夜も咲きにけり  
歩きスマホ同士ぶつかる晩夏かな  
「老いては子に従へ」と夏負けはせず

○ 柴崎 富子

一つ家に八十路爺婆屋祭  
病窓へ一声高き去ぬ燕  
もう一度街歩きたし秋日濃し  
デザートデザートの秋果こまぎれ啜りけり  
薄曇るチヨコの銀紙白露かな

○ 小林のり人

用水堰渦のみこむや赤棟蛇  
モノクロの農夫裸やミゼットと  
ウォーキングの距離のぼしけり星月夜  
僧正の黒箱膳や新豆腐  
警報機なき踏切や豊の秋

○ 三上程子

立秋やことりと胸に音のして  
黙禱の多き八月沖見やる  
もう何も言ひたくはなし敗戦忌  
棒立ちの案山子や金も知恵もなく  
行方なき台風の眼の孤独かな

○ 中野あぐり

亡き妹の睫毛やゆたに合歓の花  
末伏の厨に蜩鳴かせけり  
門の音のことりと十三夜  
をなもみとめなもみと指す秋日和  
急に日のつまりしなどと新豆腐

○ 大嶋洋子

卓に香る夫の遺愛の秋の薔薇  
厄日来る鉢植茄子に疲れ見ゆ  
木洩れ日や句碑なぞらへて椿の実  
さるすべり一本高き残暑かな  
紫煙流るる街騒遠く秋の昼

○ 綱徳女

いつとなく待つことに馴れ著我の花  
お互ひに話しかけるを待つ端居  
レースカーテン開けて火星を遠望す  
訃報つづきし溽暑の夜や風の音  
姉の仏前ほほづき多に活けて寧し

○ 中村嵐楓子

適役のマクベス夫人サングラス  
針千本のまされ覚めし昼寝かな  
走馬灯梨屋若き日語りけり  
西瓜の座へうきんな子の今在らぬ  
えにし短けれどもしかと逍空忌

○ 鷹崎由未子

指切りの指の記憶や星流る  
肩ふれぬ距離のさびしき酔芙蓉  
白芙蓉みほとり軽く暮らしけり  
十六夜生くるかぎりの孝不孝  
言霊を待ちし心の夜長かな

○ 小張昭一

有難や稲穂実らせ賜ふもの  
並びけりランチメニューの栗釜飯  
武蔵野の今はむかしや栗拾ひ  
今年始めて見たる燕は去る燕  
外方向く亜米利加露西亜冷まじや

○ 鈴木鳳来

風を待つ送電線の帰燕かな  
魂送り夕闇深くなりけり  
墓守のごときつくつく法師かな  
舟唄の通船堀や水の秋  
身に入むや岬の端の遭難碑

○ 松本峰春

空蟬の拝む形黙禱す  
飛ぶ構へばかり空蟬昆虫展  
訃は突然そこへいきなり法師蟬  
落ちてまたはじめから鳴く法師蟬  
蛸の鳴く駅いまだ線路不通

○ 木村傘休

常盤木の高き葉風や涼新た  
行つたきりの旅の一座や広島忌  
今しがた雨の上がりし秋簾  
糸瓜忌の塩大福の甘さかな  
父に似て来しと言はるや一夜酒

○ 加藤良子

世阿弥忌や夫の手擦れの謡本  
万年筆ぼとりと落とす晩夏かな  
僧正忌その後の榮子先生思ひけり  
台風の風の音聞く窓少し  
草の露リハビリの靴ぬらしけり

# 余言

安立公彦

噴水の腰折る風のため拍手

片桐てい女

公園や広場の一面に噴水のある風景は善いものだ。その噴水が、折からの強風のため傾きがちになると、噴水を見ていた人たちに拍手が湧く。この拍手は、噴水の腰を折る風に対してではない。形あるものの急変に対する興味の拍手だ。それが時間を置いて繰り返し起こると、垂直な噴水とは別な趣を観客に与える。興味は贅意に変わる。そういう微妙な群衆心理を、さらりと表現した作品と言えよう。

秋たつや畑にさやぎの雨の音

園部 露郷

「さやぎ」は、さやぐ音。立秋過ぎでの久しぶりの雨は、大地を潤し田畑を潤す。農家にとっては待望の雨である。「畑にさやぎの雨の音」は、そういう景を客観的に捉えているが、その思いは深い。その「さやぎの雨の音」に感じられる喜びの思いが、深く伝わって来る句だ。

えにし短けれどもしかと追空忌

中村嵐楓子

国文学者であり歌人であった折口信夫（釈追空）の忌日は九月三日（明治二十年生れ昭和二十八年没）。六六歳。歌集『海やまのあひだ』や、小説『死者の書』などは広く読まれている。「えにし短けれど」は、「しかと」により、追空の（信夫の）歌道や学業とのゆかりを本道により学んだことを、確と表現している。へ葛の花踏みしだかれて色あたらしこの山道を行きし人あり 追空守。

縄文の月の宴や火焰土器

高橋 和女

「火焰土器」は、縄文時代に作られた土器。博物館で一度は目にしたことのある火焰状の土器である。筒の上に一回り大きい筒が置かれ、その四方に焰のように尖った飾りが立っている。「縄文の月の宴」がその土器のほむらを良く導いている。この句を見ていると、「縄文時代」という遙か過去の、想像も出来ない時代への思いが、一瞬脳裏をかすめる気分になる。ロマンに満ちた句である。

すれちがふ人に草の香盆の月

三宅 文字

八月本部句会の特々選句。講評に次のように記した。この句、「すれちがふ人に草の香」が善い。「草の香」がみごとだ。月明りの中、すれ違う人の、白い面差しが浮かんで



来るようである。「盆の月」も良く座っている。日常の何気ない景を、みごと作品化している句だ。

この思いに变りはないが更に付け加えると、「盆の月」という大景を、すれ違う人の「草の香」に託したのが、表現のみごときに結びつくと見えよう。

表彰台爽やかに子は手を挙げて

平野加代子

この「手を挙げて」いるのは、作者の孫娘の吉雄陽香さん。二年前まで本誌の「小学生の部」で、〈落ちるまで線香花火をながめる夜〉のような佳句を出していた。

作者の「通信欄」によると、「陽香さんは目下、陸上八百メートル走の全国大会をめざして転戦中」とのこと、更に「陽香が再び俳句に戻る日を静かに待っている」とある。待っているのは祖母だけではない。私たちもそうだ。

蓬菜に仙人を見ずパイン熟る

廖 運藩

「蓬菜」は「仙人の住む不老不死の地」の他に、「台湾の異称」という解もある。「パイン」は「パイナップル」。この句、「蓬菜」を台湾とすると、「仙人」は居場所を失う。中七「仙人を見ず」がこの句の眼目だから、一句の解釈は「蓬菜」そのものとしたい。現実を見据えた上で、こういっ句の世界に足を運ぶのも、俳句の楽しみの一つだ。

よく動きよく笑ふ母秋桜

神田 恵琳

「よく動きよく笑ふ母」は、まさに母の理想であり原点である。そうして如何にも健康的だ。更にこの句には母への憧憬もある。座五の「秋桜」には、作者の、母に通う思いがある。コスモスを連想する母だったのだろう。

同時発表の、〈五右衛門風呂の後ろの闇やちちる鳴く〉の句、戦後の一時期、こういう風呂が大方の家にあつた。「後ろの闇」は、家々が庭という空間で続いていたことを示す。風呂に浸りながら蟋蟀を聞くのは悦びだ。

同行七十年拈華微笑の露けしや

齋藤 晴夫

この句の前に、〈百日紅妻若かりし昔かな〉がある。それを受けての作品。結婚記念日は、五十年目の金婚式、五五年目のエメラルド婚式、六十年、七五年目のダイヤモンド婚式と続くと続く。「同行七十年」は、このダイヤモンド婚式と見れば良いだろう。「拈華微笑」は、「以心伝心」。夫婦の理想の在り方を示す言葉と言えよう。

この句、「同行七十年」を上五に置き、座五に「露けしや」と据えた表現がみごとだ。更に中七の「拈華微笑の」が、一句の表現を不動のものとしている。

# 当月集

安立 公彦選



○ 持田 信子

シーキヤンドルと呼ぼるる灯台秋高し

秋暑し弁天詣での行き帰り

秋澄めり水琴窟の音変はり

数珠玉や記憶の糸をたどる音

己が忌は月の砂漠へ旅立つ日

○ 平沢 恵子

揚花火亡き父母に心おき

虫の音や眼は一点の赤い星

底紅の行合の空点しけり

富士鎮む三百六十度の秋気

秋風の江ノ島や鳶急降下

○ 宮崎 紗伎

しばらくはいのちの色を水中花

新涼や葉袋をまぶしく持ち

新秋のひとに添ふ風たち初むる

秋暑し眠りをたむる古代壺(縄文展)

秋の雷百物語の土偶たち

○ 川崎 雅子

独り寝の枕に近し夜の蟬

蟬時雨独りの夜の更けやすし

訪ひ来る子と並び見る火花かな

住み馴れし谷の賤が屋虫の声

時雨るるや楓一葉の紅薄く

○ 山下 健治

武蔵野は水ゆたかなり草の花

岩かげに源流探る秋の蝶(神田川上水)

爽籟や異国語まじる弁財天

杜深くつくしこひしと声しきり

雁渡し池一望の雨情の碑

# 春燈の句

安立 公彦選



方丈の庭の一隅百合一輪

神奈川 田中 嘉信

灯明の揺れて涼しき読経かな

盆踊笠の佳人の足捌き

蝸のひときは高し過疎の村

酔へばまづ軍歌一節生身魂

盆柵の一刀彫や飛驒の宿

炭坑節となりて膨らむ踊かな

拘りはほどほどが良し牛膝

盆用意我亡き後を思ひをり

新涼や湯気立つものの美味き朝

たけなはに大雨となる風の盆

静けさや闇にくぐもる夜の霧笛

百日紅母の忌忘じゐたりけり

最後迄律儀に鳴けり油蟬

大阪 中上 馥子

兵庫 向井 芳子

東京 佐俣まさを

病む地球二百十日を狂はする

ギブスより解放されし星月夜

赤富士や世界遺産の晴れ姿

山門に入るや秋立つ松の影

雲一朵姿秋めく露座仏

秋立つや古武士の如き松大樹

流灯や葎のしげみに入り給ふ

茄子の馬夫のは足の長くして

黙禱に皆老いにけり広島島

秋桜老いの暮しのひかへめに

この駅を兄征きし日や草の花

もう逢へぬ人の数多や盆の月

新涼や社に貼り紙巫女募集

新米研ぐ老いを分け合ふ妻のゐて

茨城 山崎 刀水

東京 那須 禮子

東京 大西 武士